

「何をするのか」

1) はじめに

長岡経済・産業連携会議は2023年12月開催で168回目。この会議はリーマンショックを受け、緊急会議と題して長岡商工会議所の主催で始まった。その後、毎月1回行政、金融、経済関係の関係者が集まって情報交換会として開催されてきた。趣旨としてはいざという時、緊急の対策や情報交流を速やかに対応できるように、普段から面識を持った関係にすることでコミュニケーションを図ることにある。

2) 転勤族

国県などの行政機関や国絡みの金融機関の長岡地区の責任者は転勤で長岡以外の土地から移動されてきた方がほとんどだ。当然、長岡に地縁血縁など無く、長岡の横に広がった人間関係が無い。そういう状況で、長岡に緊急事態が発生した場合、その責任者が長岡の特徴を把握して、長岡のために緊急対策を打つことができるだろうか。結局、東京など長岡以外にある本部からの画一的な指示による対策しか取りようがないということになる。

3) 「場」を作る

そこで、たとえば中越地震などのように長岡で災害や緊急事態が発生した場合、転勤族の支店長が普段から長岡の行政や金融、経済関係者と十分なコミュニケーションが図られて、長岡の行政施策、金融施策、経済施策などの情報を十分把握していたとすれば、長岡の特殊事情に応じた対策がスムーズに取れることとなる。そうすれば長岡経済界にとっても、タイムリーで的を得た対策が実施され、長岡の商工業者にとって有効かつ強力な施策となる。そのためには、関係者が普段から顔を合わせ、何気ない世間話ができるような間柄になれるように「場」を作ることが必要である。そして、その「場」がまさに長岡経済・産業連携会議なのだ。

4) 「風」の流れ

さて、この「場」から長岡経済の「風」の流れを読むことができるのではないかとということで、次回から「長岡の風」とタイトルして、座長である私が、この「場」を通じて感じたことをコラムとして書いてみたい。「場」で感じた「風」をいち早く長岡の商工業者の皆様にお届けしたいと思っている。